

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。また、「アジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN)」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員寄稿記事.....	3
➤ 研究・事例紹介.....	12
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	19
➤ 会議・イベント案内.....	20
➤ 書籍等の紹介.....	20
➤ 会員募集中.....	21

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「桜のある水辺風景 2013 写真集」発行のご案内

2013年の桜の水辺写真をとりまとめた「桜のある水辺風景 2013 写真集」が完成し、JRRN ウェブサイト上で6月21日に公開致しました。

本年は、3月1日より5月31日までの3ヶ月間で、JRRN 会員及び非会員の方々を含む水辺を親しむ皆様17名より46作品をご応募頂きました。

ご協力頂きました皆様、誠にありがとうございます。写真集は、以下よりご覧頂けます。

※「桜のある水辺風景 2013 写真集」はこちらから  
<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/78>



今年の桜の開花は全国的には少しゆっくりと咲いたのではないのでしょうか。開花してから少し冷え込んだおかげでゆっくりと桜を楽しめた地域もあったのではないですか。今年も沢山の皆様から「桜のある風景 2013」に素晴らしい桜の作品をお寄せいただきました。有難うございます。やはり桜は水辺に合いますね。全国各地に桜が植えられ、大切にされているのだと感動しています。皆さんの写真からそれが伝わってきます。

ところで桜の開花を決める標準木には(ヒカンザクラ)と染井吉野(ソメイヨシノ)が使われることが多いようです。暖かい沖縄の島々(名瀬、与那国島、石垣島、宮古島、久米島、那覇、南大東島)では緋寒桜を使っています。なぜかという桜は自生種で約100種以上、品種改良された園芸種を含めると約600種以上もあるといわれています。それぞれ開花時期が異なり最初に咲く寒桜から約1ヶ月以上楽しめるのが桜だからです。基準となる木を決めないと開花をいつと定めるかわからなくなってしまうからです。

染井吉野は江戸時代、享保年間に染井村の植木職人伊藤伊兵衛政武がエドヒガンザクラとオオシマザクラを人工交配して作った園芸種の代表品種となりました。吉宗の享保の改革の時に整備された飛鳥山の桜として植えられてから、冬の寒さがきびしいほど一斉に咲く見事さと、一斉に散る潔さから桜の大人気樹種となりました。何といても葉が出る前の枝にいきなり花が咲く様子が人々の感動を呼び起こしたのだと思います。この桜の見事さは明治時代に訪れていた外国人にも感動を呼び起こし、アメリカの首都ワシントンのポトマック河畔に桜を送ることに繋がりました。当時の東京市長尾崎行雄が荒川堤の桜を送ってから、ちょうど100年が経過し、今年新たに荒川とポトマック川の姉妹河川提携が結ばれました。

桜の色も沢山あり荒川の五色桜が有名ですが、白色、緑色、黄色、黄緑、桃色、赤色など本当にたくさんあります。このような桜を是非楽しみ続けていきたいと思います。これからも素晴らしい写真をお願いいたします。

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局長 土屋 信行

『2013 年度・河川技術に関するシンポジウム』参加のご報告

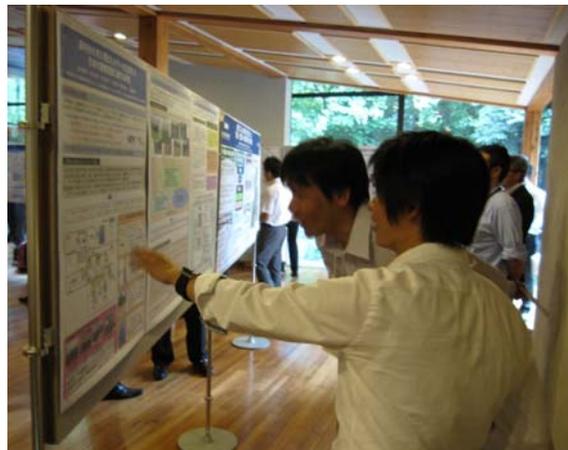
2013 年 6 月 6 日 (木) ~7 日 (金) に「新しい河川整備・管理の理念とそれを支援する河川技術」をテーマとした「2013 年度 河川技術に関するシンポジウム」が開催されました。

本年は特定テーマの一つに「国境を越える河川技術」が設けられ、「国内外の河川再生ネットワークを活用した日本の国際貢献に関する研究」と題して、JRRN が現在取り組む国際的な活動を中心に JRRN 事務局よりポスター発表させて頂きました。ポスター発表を通じては、シンポジウム参加者より貴重なご意見を多数頂戴するとともに、日本が培った河川技術の海外貢献に向けた課題を改めて認識することができました。

【主なご意見】

- ・日本の技術が他のアジア諸国のニーズに対応しているのか、そのまま適応できるのか、諸外国のニーズや社会状況（日本との違い）の把握は大変重要。
- ・あるアジア諸国では、過去に比べ日本との技術交流が疎になっており、未だ、トップダウンで、技術に根ざさず河川事業が推進される、国独特の特徴があるので、日本との技術レベルの交流は今後も大切。

JRRN では、日本の素晴らしい河川再生の事例、またその中で培われた河川再生技術を広く日本国内の方々にご紹介するとともに、こうした知見の見える化を通じ、アジアをはじめ海外に向けて普及する取組みを、今後とも推進してまいります。



ポスター発表の様子

当日の発表論文やポスターは以下よりご覧頂けます。

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/public/223>

(JRRN 事務局・後藤勝洋)

JRRN 後援「遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013」(2013 年 7 月 27 日)開催のご案内

『遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013』が、2013 年 7 月 27 日 (土) 午後に福岡県遠賀郡水巻町中央公民館にて開催されます。

本シンポジウムは、長年に渡り遠賀堀川の水環境改善に取り組む「堀川再生の会・五平太」が主催し、地元の行政機関・大学・市民団体、更に JRRN 団体会員である筑波大学白川(直)研究室が連携して開催されます。JRRN も本行事の後援団体として、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展を目標に、引き続き遠賀堀川での取組みを応援してまいります。

なお、本行事の詳細及び申込み等は以下よりご覧いただけます。皆様のご参加をお待ちしております。

※『遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013』詳細(プログラム及び申込方法等)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/297.html>

※「遠賀堀川」の紹介は、本ニューズレターの「研究・事例紹介(1)」(P12-16)をご覧ください。

(JRRN 事務局・和田彰)

## 巡回企画展「雨といきもの展」が荒川知水資料館(amoa)から巡回スタート

寄稿者：吉富友恭（東京学芸大学准教授、水の巡回展ネットワーク代表・JRRN 会員）

雨に対する印象は人それぞれ違って、嬉しく感じる人、大変さが浮かぶ人など、様々なようです。雨の音が好き、長靴を履くのが楽しい、傘をもって歩くのが面倒、ぬれて気持ち悪い…。

では、私たち人以外のいきものは、雨をどのように感じ、雨の日をどのように過ごしているのでしょうか。いろいろないきものの立場から雨をみると、雨とのつきあい方は実に多様です。雨を待っているカエル、雨粒をはじく羽をもつチョウ、川の増水でつくられた場所を好む魚や植物、みんな雨と上手くつきあいがら暮らしているのです。

巡回企画展「雨といきもの展」では、いきものにとっての雨の恵みをテーマに、3匹のカエル音楽隊「アマツブ楽団」がいきものの雨とのつきあい方を紹介します。日本の雨の特徴、雨に関する研究の成果などのパネルや絵本展示、カエルの鳴き声クイズ、雨音の楽器などの体験展示もあります。そして、注目は映像で落ちてくる雨の言葉と触れ合うインタラクティブ展示“ことばあめ”。「しとしと」や「ざあざあ」などの言葉が身体の動きに反応し、はじかれたり、たまったりして、面白い動きをします。

この展示は、複数の大学の学生と教員、気象キャスター、展示プランナーやデザイナー、研究所の研究者や国土交通省の職員等の有志のメンバーからなる「水の巡回展ネットワーク (jawanet)」が企画・開発したものです。水の巡回展ネットワークでは、水に関する様々なテーマの展示ユニットを開発し、それらを全国各地の川の資料館や博物館に巡回しています。巡回の機会を利用して調査を行いながら、多くの場所で活用できる、汎用性の高い、楽しく学べる展示を創造していくことを目的に活動しています。

一つ目の展示ユニットとして昨年に巡回をスタートした「ゲリラ豪雨展ーゲリラ豪雨に備えてー」は、これまでに全国の川の資料館や博物館13館（首都圏外郭放水路・龍Q館、荒川知水資料館、川の駅はちけんや、ウォーターステーション琵琶、筑後川防災施設くめウス、佐野常民記念館、石井樋公園さが水ものがたり館、遠賀川水辺館、リバーパル五ヶ瀬川、東京臨海広域防災公園、大河津資料館、こども未来館ここにこ、大橋川コミュニティーセンター）を巡回しました。今後も中部地方を回る予定です。

本稿でご紹介した「雨といきもの展」は荒川知水資料館 (amoa) で初公開。これから全国への巡回をスタートします。みなさんもぜひ開催館を訪問して、アマツブ楽団と一緒に、いきもの目から雨を眺め、雨とのつきあい方について考えてみましょう。

なお、この巡回企画展は、公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けています。

※巡回情報等、詳しくは以下をご参照ください。

<http://www.a-rr.net/jp/jawanet/>



第 2 回 国家の魚道管理方策シンポジウム参加報告 (in 韓国プサン)

寄稿者：野仲典理 主席研究員 (公益財団法人リバーフロント研究所・JRRN 会員)

1. はじめに

平成25年5月に韓国 (プサン) で開催された「第2回 国家の魚道管理方策シンポジウム」に参加するとともに「日本の魚道管理政策」と題して発表を行いましたので、概要について報告します。

なお、本シンポジウムへの参加依頼は、平成 23 年 8 月 31 日 (水) に日本で開催された JRRN 河川環境ミニ講座「韓国と日本の魚道整備」において、Kim Jin-Hong 教授 (韓国・中央大学) と当研究所の小川豪司研究員 (当時) ほかの交流があったこと、また、平成 23 年 11 月 23 日 (水) に韓国 (ソウル) で開催された「第1回 国家の魚道管理方策のシンポジウム」に河川生態環境工学研究所の中村俊六先生 (豊橋科学技術大学名誉教授) と渡邊茂主席研究員 (当時) が参加し交流があったことに由来したものです。

2. 概要

日 時：平成25年5月31日 (金) 9:30~17:00  
 場 所：プサン蒼遠コンベンションセンター  
 主 催：韓国農漁村公社、国立水産科学院 (韓国)  
 後 援：海洋水産部 (韓国)  
 参加者：約310名 (専門家、行政、団体、報道など)

目 的：内水面の水産資源及び河川の生態系の安全性を高めるため、国内・外の魚道管理の現状を把握し、国家魚道の統合的な管理政策を模索する

全体は3部構成となっており、第1部では、Park hae-Soon 韓国農漁村公社社長より開会の辞、Son Jse Hak 海洋水産部次官より歓迎の辞、Shin Sung-Beom 国会議員、Hong Jun Pyo 慶南道知事、Park Wan Soo 蒼遠市長より祝辞が述べられました。また、海洋水産部漁村養殖政策官による韓国魚道の統合管理法案に関する基調講演、アメリカ留学中の Dr. Seo Jinwon 氏によるアメリカの河川の連続性確保法案の発表がありました。この政策について韓国の行政機関が多数関係していることや、韓国社会における関心の高さが窺えました。

基調講演によると、韓国の魚道数は 5,081 箇所、河川横断工作物 34,012 箇所に対する魚道設置率は 14.9%、機能している魚道設置率は 4.9% という非常に低い値であり、韓国では国を挙げて魚道新設及び改良に取り組むこととし、今後 5 カ年で 439 億ウォン (約

44 億円) の予算を確保することでした。ちなみに、日本の魚道設置数は 20,000 箇所とも 50,000 箇所とも言われていますが未だその数は不明であり、一級 109 水系における数値で言えば、河川横断工作物数、魚道設置数、魚道設置率、機能している魚道設置率はそれぞれ 3,624 箇所、932 箇所、25.7%、14.1% であり韓国に比べて高い割合になっています。ちなみに、魚道がなくても自然状態で魚が遡上可能な横断工作物は 652 箇所あり、遡上可能な横断工作物の割合を計算すると 32.1% とさらに高くなっています。言うまでもないことですが、遡上可能な横断工作物を 100% にすることに越したことはありませんが、アユやサケが何百 Km 上流の源流まで遡上する必要はなく、産卵場までへの遡上が可能であれば十分と考えれば、前述の 32.1% はかなり高い割合と言えるかもしれません。今後とも、日本においては生物の生活史を完結できるように、必要な魚道は新設し、修繕が必要な魚道は修繕し、不要な魚道は撤去するといった柔軟な対応が必要です。

우리나라 어도 관리 我が国魚道管理

연간 투융자 계획 年間投融資計		연차별 투자액 (억원) 年次別投資額 (億ウォン)				
구 분	계 합	13	14	15	16	17
		합 계 합	439	6	31	78
중장기 내수면 생태네트워크 구축 魚道新設及び改良	397	-	25	70	128	174
어도설치 및 사후관리 기준정립 魚道設置および事後管理基準確立	19	4.5	4.5	3	2	5
어도산업 활성화 魚道産業活性化	19	0.5	1	4.5	7	6
내수면 어도관리 기반 구축 魚道管理基盤構築	4	1	0.5	0.5	1	1

10ウォン = 1円

韓国の魚道投資計画



プサン蒼遠コンベンションセンター



集合写真（左から6人目が野仲）

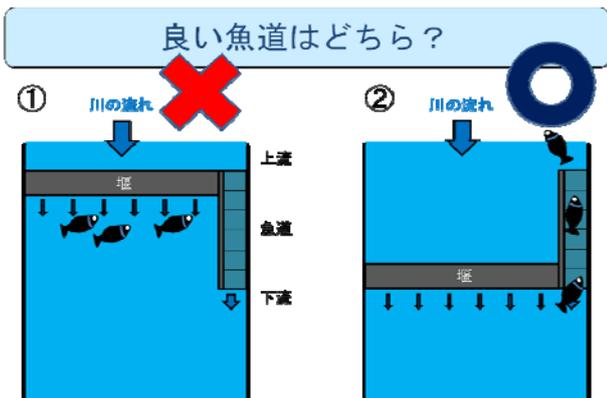


発表風景（日韓交互通訳）

第2部では、両国から3件が発表されました。

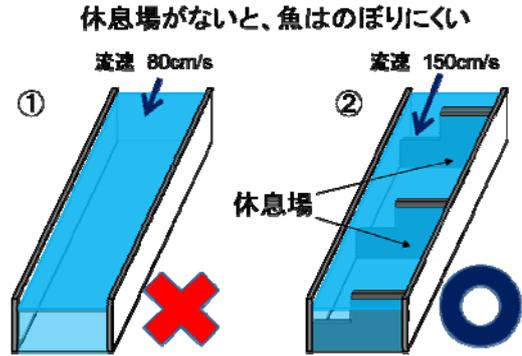
- ① 4大河川の魚道の魚類遡上の特性の分布  
Jang Min Ho(公州大学校)
- ② 日本の魚道管理政策  
野仲典理(リバーフロント研究所)
- ③ 国内の河川環境に合う魚道管理システムの構築  
Kim Jae Ok(韓国農漁村公社)

日本からの発表として、野仲から日本の法河川の区分、魚がのぼりやすい川づくりの取り組み、地域と連携した魚道の簡易改良事例などを紹介しました。



「いまさら聞けない魚道クイズ」(1)

良い魚道はどちら？



「いまさら聞けない魚道クイズ」(2)

また発表途中に、「いまさら聞けない魚道クイズ」を行い、聴講者の皆様には楽しく参加していただきました。

第3部では総合討論として、Kim Yoon 桴京大学教授をコーディネーターとして、パネラーに新聞社環境専門記者、多様な関係行政機関（環境部、農林畜産食品部、国土海洋部、海洋水産部、水公社、国立水産科学院、道の養殖産業課）が登壇し、パネルディスカッションが行われました。行政機関の司令塔が必要、日本の魚道技術・政策は非常に優れているが、韓国にそのまま適用するのではなく、地元（韓国の各地）の自然条件・社会条件に合った魚道管理を模索・実行することが大切である等々の白熱した議論が行われました。



パネルディスカッションの様子

3. おわりに

今回は魚道を主なテーマにした韓国との技術交流でしたが、河川・流域再生など幅広い分野における両国の技術交流がさらに活発に行われることが期待されます。なお、今回のシンポジウム参加に際して、韓国農漁村公社農漁村研究院のKim Jae-Ok（金在玉）さん、Kim Hyung-Joongさんのご協力・ご支援をいただき、感謝申し上げます。

## 「第8回隅田川クリーン大作戦」への参加をとおして

寄稿者：瀬尾弘美（株式会社建設技術研究所 広報室・JRRN 会員）

平成25年6月15日（土）、隅田川流域クリーンキャンペーン実行委員会主催の「第8回隅田川クリーン大作戦」が行われました。この活動は、隅田川沿川の美化活動に取り組む市民団体、東京都行政関係者および隅田川に関心のある一般市民などが隅田川沿いの清掃活動を行うもので、株式会社建設技術研究所は、協賛企業として参画しています。

当日は、梅雨時にもかかわらず晴天に恵まれ暑すぎる陽気のなか、4つのコースに分かれ、途中、開業後1年のスカイツリーを眺めつつゴミを集め、最後は浜町公園で全メンバーが集合しました。

全体の参加者は約180人で、このうち弊社からは社員やその家族19名が参加しました。以下に、参加者の主な感想を紹介します。

### 【参加者の感想】

隅田川クリーン大作戦のように、地域の活性化等に貢献できる機会に参加できたことは、非常に貴重な体験となりました。日本企業のグローバル化で海外に目先が行く中、日本企業が拠って立つ地域に貢献することも重要だと思います。

5歳の息子と参加しました。親子で参加できるイベントですし、息子はゴールした時は達成感みたいなものを感じていたようで、誘ってよかったと思います。所々で散策路と橋げたとの距離が近いところがあり、普段はなかなか触ることができない橋げたに触れることができた息子は大喜びでした。息子も「ゴミ拾いは、楽しかった」と言っていました。

私の率直な感想は「ゴミから街の顔が見えてくる」。5年連続、同じコースを歩き、ゴミを拾いながら学んだ感覚です。隅田川の今の姿は、まさに地域の暮らしと心の鏡。東京の母なる川の名に恥じない素敵な水辺を目指し、来年も本行事に参加して頑張りたいと思います。

気持ちの良い晴天で、心身ともリフレッシュできました。隅田川の川沿いは、想像以上に自然が豊かで、魚やカニなどの動物も数多く見かけることができました。川から見た東京の景色は、また格別。

きれいになってきたはずの隅田川ですが、少し臭いがあったのが残念。水質が悪くなってきているのでしょうか。



参加した弊社メンバー

わたし自身は2回目の参加で、前は小学生だった娘と一緒にでしたが、公共の場所の清掃活動などしたことなかった娘は、小学生らしい正義感で目についたゴミすべてを拾う勢いを見せておりました。この活動を通して、公共の場所をきれいに保つことの大変さを少しは理解する、教育的な機会にもなったと思います。

また、河川環境整備の仕事に長年携わってきた立場からは、東京の水辺のシンボルである隅田川が、テラス整備により人々により親しまれる空間として育ちつつあることをうれしく思いました。



隅田川テラスの整備状況

最後に、ご尽力いただいた実行委員会のみなさんにお礼を申し上げます。また、現地を歩くことで見えてくることがたくさんありますので、社会基盤整備を担当する一員として、地域貢献活動を越えた自己研さんの機会をとらえ、今後の弊社社員のさらなる参加を期待します。



# 7月は河川愛護月間です



JRRN 会員寄稿(4)



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 15～那珂川～

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

♪ささの葉さらさら のきばにゆれる  
お星さまきらきら きんぎん砂子

（唱歌『たなばたさま』 作詞：権藤はなよ，補作詞：林柳波，作曲：下総皖一）

表1 那珂川のフィールドトリップの主な行程

9:20	大学発
11:30-12:45	昼食(道の駅馬頭)
13:20-13:39	余笹川 黒川合流地点
13:43-14:10	大水車小屋(道の駅東山道伊王野)
15:30-15:48	鎌倉山登山
16:04-16:35	那珂川川遊び
16:53-17:05	石畑の棚田(棚田百選)
17:20-17:30	御前山ダム着
19:00	大学着



図1 余笹川合流点の堤防上に建つ碑文

### 1. みんなで那珂川に行こう！

6月1日に筑後川を周って以来、川を周ってなく、川系男子にとっては深刻な川不足だった6月。それを一気に解消する川めぐりが実施された。2013年6月29日に研究室のフィールドトリップで那珂川へ。今学期3度目のフィールドトリップ。なんと今学期のゼミ参加者13人（先生含む）全員がそろう。いつも誰か欠員が出るのが世の常ではあるが、全員がそろった川めぐりは近年稀に見る快挙かもしれない。

那珂川は栃木県的那須岳を源とし、栃木県、茨城県を流れ、太平洋に注ぐ。流域面積約3,750km<sup>2</sup>、幹線流路延長約150kmであり、ともに関東地方第3位の河川である。関東地方の川と言えば利根川や荒川、多摩川などの大河川が人々の賑わいを感じる「動」の性格を持った川だとするならば、那珂川は大河川でありながらも鳥や魚の吐息すら感じ取れる「静」の性格を持った川だと思える。

静かに流れる夏景色の那珂川を表1のような行程で那珂川を巡った。



### 2. 碑文が語る余笹川

大学から出発して2時間以上かけて那珂川上流域へ。途中昼食をとり、さらに上流へ。那珂川町を流れる那珂川の支流の三蔵川と余笹川の合流点へ到着。

合流点には記念碑が建てられていて、その碑文には平成10年に被災した現場であることが記されている。白横線はここまで水位があがったことを鮮明に刻んでいる（図1）。

平成10年8月26日から31日にかけて那須町で1,254mmの雨が降った。日本の年平均雨量は1,750mmであるが、5日間で1年の3分の2以上の雨が降ったと解釈すれば川が暴れだすのは必至である。看板に刻まれていた当時の写真をみると、どこが河道でどこが堤内地かもよく分からない。この時の被害は死者5名、行方不明者2名、住家被害2,977棟である。

今回訪れた際には清らかなせせらぎのある川の表情で、美しい川の表情しか我々は知らないが、ここに建ち続ける碑文は過去の恐ろしい表情を「決して忘れてはならぬ」と後世に警鈴を鳴らし続けてくれるだろう。



図2 アユノボリ



図4 整備された三蔵川のサケ産卵床



図3 大水車小屋



図5 境橋から上流を望んだ那珂川

### 3. 大水車小屋とサケの産卵床

余笹川と三蔵川の合流地点から三蔵川をさらに上流へ遡って行くと道の駅「東山道 伊王野」に到着。道の上を見上げるとコイノボリ、いやアユノボリが泳いでいる（図2）。道の駅の端に大きな小屋があるので傾斜を駆け下りて近づいてみる。見上げるほどの大きな水車がギルギルと音を立てながら周っている（図3）。大水車が直径12m、小水車5.6m。（こんな大きな水車を見たのは高梁川水系の小田川の「親子孫水車」を含め2回目だ。）この水車の動力を用いてそばを製粉し、製粉した粉からそば生地をつくりおいしいそばが味わえる。水車を回す動力の水はすぐ脇を流れる三蔵川から引かれている。

三蔵川のこの付近は余笹川水害の翌年にも大きな被害を出している場所でこのあたりも工事により水辺が整備された。この復旧工事の最中にサケが数匹三蔵川へ遡上してきたのが確認されたことをきっかけにサケの産卵床を整備しつつ災害復旧工事が行われた（図4）。石のサイズもこぶし程度でサケが河床を自力で掘ることができそうだ。水はくるぶし上あたりでさらさらと流れており、思わず川に足をつけたくなる。先生はいつの間にかウォーターシューズに履き替えていて川遊びを楽しんでいる。ウォーターシューズを持ってこな

かったことを悔やみ我慢していたが、川遊びの誘惑には勝てず、すばやく靴を脱ぎ棄て、裸足で川の中に。水の冷たさも程よい温度で、心地よい。普段は裸足で川遊びをすることはめったにないが、上流域の透き通ったゴミひとつない川だからこそガラスなどの心配をせず、川を信用して平気で川底を歩き回る事ができた。今年最初の川遊びは三蔵川となった。これを皮切りに今年はいくつの川に入って遊ぶことができるか楽しみだ。

### 4. 川めぐりは山登り

伊王野を今回の川めぐりの最上流地点として、川を下り、那珂川へ。橋を渡っていると、川のあちらこちらにアユ釣りの人々が立ちつくしている。特に堺橋から上流を望んだ写真は壮大だ（図5）。「静」と「清」を合わせ持った那珂川の空間の中に人が溶け込んで恵みを楽しんでいる。

那珂川の美しい流れを横に那珂川を下る。少し山間に入りこんだところで下車。茂木町の鎌倉山登山道の入口に到着。登山道付近には小川が流れていたのだからこれを見るために先生は立ち寄ったのだらうと想着いて、涼やかな気持ちで小川を眺めていたら、見事に期待を裏切られた。小川をちょろりとだけ見た先生は小



図6 山の上で川を背景に集合写真



図7 母と娘の川遊び

川に架かる橋を渡りどんどん山の中へ。身構える間もなく登山が始まった。先生を先頭に13人が一列に並び山道につくる行列はどこか滑稽で、思わず笑っていると「先輩、そんなに可笑しいですか？」と後輩に呆れられる。鎌倉山は216mと低山ではあるが、傾斜は急で、それなりの体力を要する。ふと後ろを振り返ると先ほどまで一定間隔を保っていた行列も乱れ始めていた。自身も笑う余裕がだんだん無くなってきたところを見ると意外と応えるミニ登山だ。車中でスポーツマンの後輩が「オレはきついトレーニングをする時は自分にとって良い未来を想像して乗り切ります。そうすればどんなきつい練習も乗り越えられますよ。」と話していた言葉がふと頭に浮かぶ。ふーんと他人事のように聞いていた後輩の格言がまさか10分後に自身の頭の中にこだまする状況になるとは思いもしなかった。「このキツイ山道を登ればきっと開けた絶景が見える」と自分に言い聞かせながら足を前に運んだ。

登り始めて10分。山頂付近の展望箇所に到着。山際を取り巻くように蛇行しながら流れる那珂川と広大な耕地が広がっていた。川沿いを走っている時にはよく分からなかった河道の蛇行もここから見ると狭窄部で流れを反転させ、流れているのもよく分かる。13人全員意志と根性が強く、一人も休むことなくあっという間に全員が山の上にそろった(図6)。

川めぐりはただ川に近づけばいいわけではない。「木を見て森を見ず」ならぬ、「水を見て川を見ず」。先生と川めぐりに行くと、いつもそこに山があれば唐突に山登りが始まるが、きっと先生は自らの五感で川めぐりの真髄を感じ取ってほしかったに違いない。(考え過ぎですか？先生・・・)

## 5. 川に入れば誰でも川系男子・川ガール

ミニ登山を終え、下山。車でちょっと移動し、鎌倉山付近の那珂川の河原へ。さっきまで登っていた鎌倉山を今度は川から見上げる。川岸には川船がぼつんと置いてあり、ここでも那珂川の「静」を感じ取れる。手を繋いだカップルが水際の礫河原を歩いているのを見ると川デートもいいものだなあとちょっとうらやましくも思えた。



図8 石に付着した川ゴケ

また、川の浅瀬をお母さんに手を引かれて女の子がよちよちと水の中を歩いている(図7)。川デビューだろうか？ちょっと微笑ましい。

水際の護岸に腰を下ろしながらぼーっと川の流れを見ていたら上流で短パン、半ズボンの少年、いや先生が、いつの間にか着替えて川に腰をおろし気持ちよさそうに浸かっている。先生が川遊びをしているのを護岸から遠巻きに眺めていたゼミ生もうらやましく思ったのか、一人、また一人とズボンの裾をたくし上げ、ゆっくりと川の中に入っていく。美しい川を目の前にすると、頭の中では濡れると分かっているもみんな川の魅力には勝てない。ヒンヤリとした川の中に長い時間立ち尽くす。川の中に入って遊んでいると誰もが川ガール、川系男子になる。ただ、川の中の石に川ゴケがびっしりと生えている(図8)のを見て、「あ！すごい！こんなところにもバイオマスが生産されてるっっ！」と発言するあたりは川の研究室ならではのところだろうか。川ゴケの生育がいいのは那珂川のバイオマス量が多いことも推察できる。草食性のアユには育ちがよいほど棲みやすいのだろう。



図9 石畑の棚田（棚田百選）



図10 御前山ダム

## 6. 潤う土地

### 6-1. 石畑の棚田

川遊びを終え、那珂川の本川を離れる。田園地帯を通る。山道を通りすぎると段々に田んぼが形成されている。棚田百選の一つの石畑の棚田である。関東地方には3つしかない百選のうちの一つである。段々の一つ一つに水が張られていて、稲も青々と生長している。山に囲まれた地で青々した田んぼが見せる風景は夏らしい（図9）。

川から用水路で直接水を引くことができない棚田は山からの水を集めてくる必要があったり、大型の機械で田植えや稲刈りができなかつたりと大変手がかかる。それでも棚田が続いてきたのは米を少しでも多く育てたいという当時の人の執念と、この美しい風景を残していきたいと思う現代の人の気持ちからだろう。

### 6-2. 御前山ダム

棚田を離れ少し行くと御前山ダムに到着（図10）。このダムは農林水産省の所管するダムで、2011年に完成した新しいダムである（ロックフィル、堤高52m、堤頂長298m、総貯水量7,200,000m<sup>3</sup>）。農業用専用ダムはため池のような小さなアースダムは多いがこの規模の農業用専用ダムは珍しい。

5,544ha（55.4km<sup>2</sup>）を灌漑する。那珂川流域の耕地面積全体約710km<sup>2</sup>からすると約12分の1と大きな役割を担っている。もっとダムを良く見学したかったが、ダム堤体は見学できないようにフェンスが張られていて非常に残念だった。

夕暮れのダム湖を眺めてこの日のフィールドトリップは終了し、大学への帰路についた。那珂川が大好きになるのに十分な川めぐりであった。

7月は河川愛護月間。川に出かけましょう！



（河川愛護月間推進標語 松永 卓真，写真 筆者撮影『川の魅力』）

#### 【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川に入って遊ぶこと。

## 水辺からのメッセージ No.50

岡村幸二 (JRRN 会員)

### 梅雨の晴れ間の日差し： 屋敷林がつくる多彩な緑と一体になった川沿いの風景



撮影：2013年6月（千葉県・香取市佐原）

#### ◆水郷のまち佐原をゆく

佐原市街を流れる小野川は、江戸時代から水運で栄えた“商人の町”の面影を残します。現在、佐原駅近くの中心市街地がさびれているのに比べ、小野川沿いの“伝建地区”は江戸情緒が残されていて「伊能忠敬を育んだまち」として人気を集めます。わが国最初の日本地図である「伊能図」(1821)を、50歳を過ぎてから全国の海岸線を歩き通した執念には驚かされます。55歳で北海道南岸の測量を完了して以後、計10回に及ぶ測量を71歳まで行いました。

#### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)

## 遠賀堀川の未来を考える

筑波大学白川（直）研究室・遠賀堀川プロジェクトチーム（JRRN 団体会員）

### 1. 遠賀堀川の概要

遠賀堀川は、福岡県北部を流れる一級水系遠賀川の本川から北九州市八幡西区にて分派し、中間市、水巻町を経て再び八幡西区に入り、折尾の中心部を通って洞海湾に注ぐ長さ約 12km の半人工河川である。18 世紀中頃の宝暦年間に、洪水軽減、灌漑用水供給、舟運路開設を目的として掘られたとされている。最初の開削は元和洪水（1620 年）の直後に試みられ、工事完成までに約 150 年を要したことになる。

通水からおよそ 100 年後、日本を駆り立てた近代化の波は遠賀堀川に輝きの光を当てる。筑豊炭田と北九州の工業地帯を結ぶ物流路として、川ひらた（五平太船）が絶え間なく行き交うにぎわいをみせたのである。半世紀あまりの喧騒はやがて鉄道輸送の定着とともに去り、遠賀堀川はじっと地元の風景の底に溶け込んで人々を待つ小さな流れとなり再び一世紀近くの時を過ごすことになった。

いま、遠賀堀川は堀川運河とも、また単に堀川とも呼ばれている。さらに大部分は新々堀川という名も持つ。名称のみならず、10km 少々の都市河川とは思えないほど多様な顔を見せるのもこの川の魅力である。始まりは人造であっても、250 年以上流れ続けた水は歴史を紡ぎ、文化を育てた。逆に自然河川ではありえないような流路の分断があり、開発の風を受ける。それも人と近い川であるがゆえといえよう。

残念なことに、この川は現在十分に人々の好意的な関心を受けているとは言えず、住民の手による清掃活動や水質浄化への取り組みが功を奏して格段の環境改善が実現しているものの、将来への展望がいまひとつ確かに感じられない状況にあるようである。今回はよそ者なる若者の視点から、この川がどんな可能性を持っているのか、勝手ながら考えてみることにした。

### 2. 遠賀堀川を見て考える

#### (1) 縦断方向の連続性

遠賀堀川の歴史における舟運の意義を考えたとき、取り入れ口から洞海湾へ至る「縦断方向の連続性」がこの川を考える軸の一つとなりうる。この観点に立ち、上流から下流へと順にみていきたい。本ニューズレター 2013 年 1 月号の「川系男子の『川と人』めぐり」にも遠賀堀川が取り上げられているので参照されたい。



図1 笹尾川合流点付近の堀川



図2 寿命（じめ）の唐戸



図3 遠賀川水源地ポンプ室

## (2) 過去の栄華を偲ぶ、そして分断

取水口（寿命の唐戸）で遠賀川本川から分派された「堀川」は数百 m もいかないうちに笹尾川に合流する。この先しばらく遠賀堀川は笹尾川の流れを借りることになる。

笹尾川合流点付近の堀川は水量も豊富で、周りに農地が広がり自然豊かである（図1）。取り入れ口の寿命の唐戸（図2）はつくられてから200年以上経って腐食が見られはするが、現在も当時のまま残っており市の有形文化財に指定されている。それにもかかわらず周辺には小さな説明看板があるだけで少しもったいないと感じた。市内に残された江戸時代の貴重な治水施設なのでもっと印象づけてゆくべきではないだろうか。

笹尾川が遠賀川へ合流する直前から「新堀川」が分岐する。分岐地点近くにある旧官営八幡製鉄所（現新日鉄）の水源地ポンプ室（図3）は「九州・山口の近代化産業遺産群」に指定されている。日本の近代化における重工業の中核を担った重要な施設である。このように歴史ある建造物が多い中、遠賀堀川が影を潜めてしまっているように感じる。遠賀堀川も遺産の一つとして注目されていってほしいものである（堀川運河は2007年に経済産業省の「近代化産業遺産群33」に認定されている）。

新堀川は笹尾川から分派すると、すぐに黒川へ合流する。この区間は現在水が流れておらず（図4）、ただ工業用水の導水管があるのみとなっている。寿命の唐戸から入った水はいったんここで途切れ、もちろん舟が通ることはできない。

## (3) 住宅地の今、そしてまた分断

遠賀川と黒川の合流点付近に、重厚な佇まいの中間唐戸（図5）がある。遠賀堀川で最も長い歴史を持つこの唐戸は、実に250年も当時の姿を留めている。しかし往時の活躍を今の姿にみるのは難しい。取水という役割を失った中間唐戸は時代の変化から身を隠すようにひっそりとたたずんでいた。

さらに下流へと歩みを進めると中間の市街地へと入る。かつて上下流を「つないで」いた堀川が、現在ではまちを「分け隔てる」境界線のごとく南北に走っている（図6）。近所の住宅に背を向けた河道には人の香りが感じられない。もし、この川が豊かな水をたたえ、子供たちがいきいきと遊んだり親子で散歩したりできる空間に生まれ変わったら…そんな、川と地域の人々が新たな形につながる未来を想像したくなくなってしまう。

さらに進むと堀川は突如として流路を絶たれることになる。曲川との交差である（図7）。ここはかつて



図4 新堀川



図5 中間（なかま）の唐戸



図6 住宅地内の直線河道

曲川が遠賀堀川の下をくぐる「伏越」によって下流へと繋がっていた。しかし、ゴミ詰まりや洪水対策として流路が分断された今、堀川と曲川の水位差約1.4mを埋めるものは何もない。曲川が地上に息を吹き返したと同時に、遠賀堀川は途絶えたのである。



図7 曲川との交差点



図8 河守神社

#### (4) 時代を結ぶ文化と自然

中間市から水巻町に入ると、河守神社（図8）と車返しの切り通し（図9）がある。東水巻駅と折尾駅のちょうど中間点あたりになる。この辺では川沿いに散策や犬の散歩をしている人を時折見かける。歩いていくと住宅地を抜け自然豊かな山の中のような景色が心地良く感じられた。また野生の鷺を見つけ、驚きと共に自然が残されていることに感心した。切り通しの部分は水面が道よりかなり低いところにあるので川を近くに感じられないのは残念だが、両側を岩盤に挟まれた空間に川のせせらぎがこだまするのは風情がある。

山道を抜けてしばらく進むと「舩石（もやいいし）」と書かれた案内板が立っていた。橋を渡り近寄ってみると、草むらにちょうどげんこつ2つぶんほどの細長い石が立っているのが分かった（図10）。これは、その昔遠賀堀川でも舟運が栄えていた時代、川ひらたを係留するために使われた石らしい。この石に穴を開け、綱を通して船を結び付けていたということである。現在その付近では、背の高い雑草が茂り河道の幅がかなり減少しているため、この場所で船が行き交っていたさまを想像するのは難しいように感じられる。もちろんこの状態でも自然のままの川の魅力がひしひしと伝わってくるのだが、もう少々植生に手を加えて河道を広げれば、さわやかな緑と川ひらたが共存する風景の実現も夢ではないだろう。時代とともに変わりゆく堀川を眺めながら、もやい石は何を思うのだろう。



図9 車返しの切り貫き



図10 もやい石

(5) いま、そしてこれから

小さな魚の群れやそれを狙う鷺を写真に収めつつ(図1 1)川沿いを進むと、折尾駅前商店街が見えてきた。そこには昔ながらの民家の並びや石畳といった、どこかしみじみとした風情を感じさせる街並みが広がっていた(図1 2)。近くの堀川橋などには船が浮かぶ様子を表した石碑や柵も見られ、川ひらたが如何にこの街の人々の心に溶け込んでいるかということが窺い知れる(図1 3)。しかしながら駅前の遠賀堀川は流れがほとんどなく、水も淀んでしまっている部分が多いように感じられた。流量が増えて流れが蘇り、商店街の賑わいの中を川ひらたが優雅に行き交う情景を思い描かずにはいられないのであった。とは言っても、近年の駅前再開発の一環としてこの商店街一帯は退去することが決まっている。この再開発に遠賀堀川再生の未来は託されたのである。

折尾駅より下流は無機質な造形の河道が続く。駅のすぐ下流は左岸側に商店がわずかに並び、川岸にはツツジの垣根の間にベンチが設置されている。うまく活用すれば、店によったついでに川岸でちょっと一息できそうな場所である。

30分ほど歩くと、新々堀川排水機場(中間の唐戸より下流は新々堀川という名がつけられている)を経て金山川と合流する。合流点には屋根付きベンチが設けられていて川を広角に眺めることができる。合流後の遠賀堀川は川幅約50mとなり、大きな川になる(図1 4)。合流前までの閉塞感のある河川景観から一変し、開放的な空間が広がる。また海が近いためか、汽水域に見られる貝類が護岸に張り付いている。

本城橋までたどり着くと遠賀堀川は洞海湾へと注ぐ(図1 5)。洞海湾周辺は掘り込み港となっており、重化学工業を中心とする北九州工業地帯が発達している(図1 6)。日本の近代化を支えた官営の八幡製鉄所が建設されたのもこの場所であり、筑豊炭田から積み出された石炭は五平太船によって遠賀川、遠賀堀川を通り、製鉄の燃料を送り続けた。ここに遠賀堀川を下ってきた五平太船が絶えず石炭を下ろして再び石炭を積み筑豊へ帰って行ったことを想像すると、当時の近代化の熱に触れたような気持になる。



図1 1 魚を狙う鷺



図1 2 駅前商店街



図1 3 川ひらたをかたどった柵

### 3. 宝川が戻ってくるために

遠賀堀川はかつて宝を生む「宝川」と呼ばれていた  
そうである。しかしその後、当初の目的であった灌漑  
や舟運の機能は薄れ、遠賀川本川の洪水対策としての  
意味も持たず、流路は分断されて都市排水路の役目に  
甘んじることになってしまった。

とはいうものの遠賀堀川は地域住民の生活や意識に  
深く根を下ろしている。地元にとってかけがえのない  
川であるとともに、よそ者からみて興味深い川であり、  
産業遺産として現代の日本を築く礎を演じてきた川で  
もある。自流域住民にとっての意味、他流域のよそ者  
からみた関心、そして客観的に果たしてきた役割と、  
「自・他・客」の三方面から確固たる価値が認められ  
る。

寿命の唐戸から始まる堀川は笹尾川に入る地点でい  
ったん途切れる。そして新堀川でまた不連続となり、  
曲川との交差点において完全に分断されている。この  
分断は単に空間的なものでなく、水量の問題にも影を  
落としている。遠賀川本川はともかく、笹尾川、黒川、  
曲川、金山川といった周辺の中小河川に比べても遠賀  
堀川の水量はとるに足りない。特に曲川交差から折尾  
駅までの区間は深刻である。集水域をほとんど持たぬ  
この川はどんな運命を切り拓いていけるだろうか。

開削以来 100 年新田に命の水を届け、50 年「黒いダ  
イヤ」(石炭)を運び、続く 100 年を静かに眠った遠賀  
堀川は、そろそろ地域住民の心に潤いと誇りという無  
形の「宝」をもたらす時期に達したのかもしれない。  
新堀川の水無し区間は自然豊かな水辺を白紙から創造  
できる格好の場を与えていると捉えられなくもない。  
折尾駅周辺では大規模な再開発が計画されており、暗  
渠部を地上に出すなど水辺空間の改善を図る好機とも  
いえる。7 月 27 日には水巻町にて『遠賀堀川の未来を  
拓くシンポジウム』が開催される。本稿を踏まえ、学  
生の視点から自由な発想で遠賀堀川のこれからについ  
て提案をしたいと考えている。

(筑波大学遠賀堀川プロジェクトチーム：

坂本貴啓・田中聡大・鴨志田穂高・  
能登江梨香・中前千佳・小口春菜)

#### 参考文献

遠賀川下流域河川環境教育研究会：「遠賀堀川の歴史」  
中間市立歴史民俗資料館：「よいこの堀川探検」、2000  
堀川再生の会・五平太：「遠賀堀川とをりをを」、2012  
松木洋忠：「遠賀堀川の目的と機能」、九州技報、2010



図 1 4 金山川合流後の遠賀堀川



図 1 5 遠賀堀川河口から洞海湾



図 1 6 洞海湾の工業地帯

RIVER OF LIFE プロジェクト・住民啓発プログラム (ROL-POP) ～マレーシア国クラン川における取組み紹介

日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN) 事務局

ARRN (アジア河川・流域再生ネットワーク) 会員であるマレーシアの国際 NGO・地球環境センター (Global Environment Centre: GEC) より、首都クアラ・ Lumpur で進められている河川再生プロジェクトに関わる住民啓発プログラムの取組みをご紹介します。本プログラムの実施責任者である GEC・カリタサン博士より提供頂いた概要説明資料を、JRRN 事務局で日本語意識しましたので、以下に概要をご紹介します。英文資料及び日本語意識資料の詳細は以下よりご覧頂けます。

※日本語・英語資料はこちらから

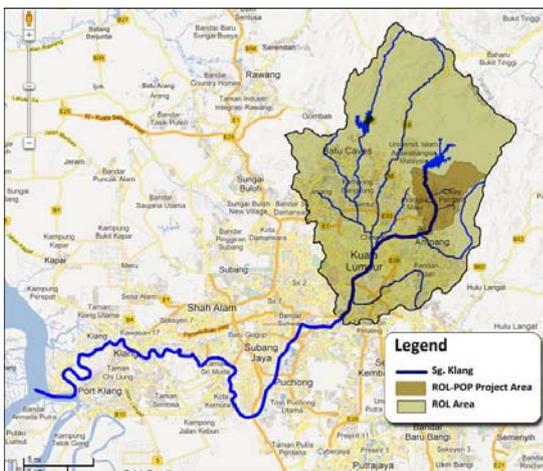
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1269.html>

**[1] RIVER OF LIFE (ROL) プロジェクトとは？**

River of Life (ROL) は、マレーシア政府により進められているマレーシア最大の河川再生プロジェクトで、クラン川 (マレーシアの首都・クアラルンプールを流れる都市河川) の水質改善を主目的に実施されています。2020 年までにマレーシア水質基準の「Class IIB」レベルまで改善を図り、クラン川を活気に満ちた、高い経済価値を生み出す多様性に富む水辺へと再生することを最終目標に掲げています。

**[2] ROL 住民啓発プログラム (ROL-POP) とは？**

ROL 住民啓発プログラム (River of Life Public Outreach Programme: ROL-POP) は、本プロジェクトに関与する人々 (「地域住民」「地元自治体」「学校」「飲食店やカフェ」「不動産開発業者」「工業関係者」) の協力関係 (パートナーシップ) を醸成し、クラン川の水質環境に直接影響を与える人々・団体の態度や行動を改善していくことを狙いに進められています。



ROL-POP targeted groups

ROL-POP の対象者

ROL-POP プログラムの計画から実施までの手順は以下の通りです。

- (a) 活発な関係者との話し合い
- (b) 関与する関係者相互の協力関係の構築
- (c) 参加型かつ実践的取組の推進
- (d) 汚染源の管理
- (e) 良好で高性能な連携関係の構築
- (f) 流域レベルの統合的アプローチ

また、ROL-POP プログラムは以下の 7 つの戦略を基本に進められています。

1. 関心と期待を高める
2. 知識と技術を高める
3. 共同責任の精神を醸成する
4. 汚染源を削減するための行動を興す
5. 協力関係構築の手助けをする
6. 協力とやる気を提供する
7. 持続に向けたモニタリングと賞賛を行う

ROL-POP プログラムの実施期間中は、ROL-POP ウェブサイトを通じて関連する情報や活動参加者、具体活動履歴やその成果を共有しています。

更なる情報は ROL-POP ウェブサイト (<http://www.myrol.my/>) や Facebook (<http://www.facebook.com/myrolpop/>) をご覧ください。

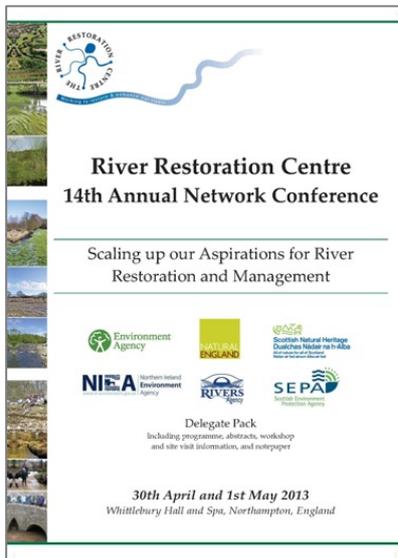
「第 14 回 英国河川再生センター年次講演会」発表概要集の紹介～イギリスの最新河川再生事情を学ぶ～

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局

英国河川再生センター(RRC: River Restoration Centre)が毎年主催する第 14 回年次講演会が、「河川の再生と管理に向けた志の更なる高揚」をサブテーマに、2013 年 4 月 30 日～5 月 1 日の二日間に渡りロンドン郊外で開催されました。

本行事の発表論文概要やプレゼンテーション資料など一式が 2013 年 6 月に RRC ウェブサイト上にて公開され、以下よりご覧頂くことができます。(英語版)

①行事参加者への配布冊子(発表論文概要集、ポスター、参加者名簿等 全 156 ページ)



※以下よりダウンロード

[http://www.therrc.co.uk/2013%20Conference/Outputs\\_Presentations/Delegate\\_Handbook\\_Final.pdf](http://www.therrc.co.uk/2013%20Conference/Outputs_Presentations/Delegate_Handbook_Final.pdf)

②全プログラム及び各プレゼンテーション資料

PROGRAMME OF EVENTS		
Day 1: --- Tuesday 30 <sup>th</sup> April ---		
09:00	REGISTRATION on River Restoration Area	05 mins
Breakfast in the Lounge		
09:30 Breakfast Table (Circular) University and RRC Chair		
10:00	Wildfowl and Waterfowl	15 mins
Andrew Hill, Cranfield University and RRC Chair		
10:30	Research Address	15 mins
Dr. Paul Collins, Environment Agency		
11:00	Discussion	15 mins
11:30	Assessments	15 mins
12:00	BEAR	15 mins
Mark and Julie		
Break 15		
LUNCH in the Lounge		
Day 2: --- Wednesday 1 <sup>st</sup> May ---		
09:00 Breakfast Table (Circular) University and RRC Chair		
10:00	Local River (Event, Activities, Project, Status, aims and objectives)	15 mins
Gareth Green, River Action UK		
10:30	Management opportunities for riverine and flood risk	15 mins
Management, benefits, the development of a network connecting		
to the Riverbank		
11:00	Shifting the Riverbank (Event, Activities, Project, Status, aims and objectives)	15 mins
Dr. Paul Collins, Environment Agency UK		
11:30	Q&A of local riverine and activities	15 mins
Dr. Paul Collins, Environment Agency UK		
12:00	Discussion	15 mins
12:30	LUNCH in the Lounge	15 mins

※以下よりダウンロード

[http://www.therrc.co.uk/2013%20Conference/Outputs\\_Presentations/Programme\\_of\\_Events\\_Final.pdf](http://www.therrc.co.uk/2013%20Conference/Outputs_Presentations/Programme_of_Events_Final.pdf)

二日間の講演会では、以下をテーマとしたセッションにおいて、約 70 の口頭発表、18 のポスター発表が行われています。(セッション名は意識です)

- ・セッション 1 :
  - 制御された川から次なる飛躍へ
- ・セッション 2 :
  - 生態系サービス：実施に向けた理論
  - 川と呼ぶにふさわしい再生へのデザイン
- ・セッション 3 :
  - 河川再生のためのツール
  - 欧州水指令の更なる上を目指して
  - 回遊魚とウナギの魚道
- ・セッション 4 :
  - 再生におけるエネルギー勾配：Nene からノルウェーまで
- ・セッション 5 : ワークショップ (複数テーマあり)
- ・セッション 6 :
  - 再生のための流域スケールと形態学的な過程
  - あなたの川への理解を促すための商売道具
  - コミュニティ参画と普及
- ・セッション 7 :
  - 欧州の資金の最大限の活用

なお、左記①でご案内した参加者配布資料では、以下のような英国における最新河川事情を学ぶことができますので、ご興味のある方は是非ご覧下さい。

- ✓ **口頭発表要旨から**、イギリスにおける最新の河川再生に関わる事例、技術、課題、仕組みの概要が分かります。
- ✓ **18 の発表ポスターから**、最新の事例や技術、更にはプレゼンテーションのトレンドが見えてきます。
- ✓ **9 社の民間コンサルタントの企業広告から**、英国の民間企業の役割、また最新サービスの内容が見えてきます。
- ✓ **全参加者名簿(約 300 名)から**、政府職員、NPO、民間コンサルタントなど様々なセクターが連携する姿が見えてきます。
- ✓ **冊子全体から**、英国河川再生センターの優れた実績、また英国及び欧州の河川再生分野での貢献度が理解できます。

**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■「ミツカン水の文化センター第 13 回里川文化塾『野草探しから草木染め&ガサガサ体験』(7/21 開催)**

ミツカン水の文化センター第 13 回里川文化塾のプログラム・リーダーをお務めの前川太一郎様(JRRN 会員)より御提供頂いたイベント情報です。

- ◇ 日時 : 2013 年 7 月 21 日 (日) 10:00~15:00  
(小雨決行。荒天時の予備日=7月27日(土))
- ◇ 会場 : 多摩川河川敷「とどろき水辺の楽校」フィールド  
[集合] 9:50 [現地解散] 15:00 ごろ
- ◇ 主催 : ミツカン水の文化センター
- ◇ 参加者 : 15 組  
(30 名程度。小学生のお子さん 1 名につき保護者 1 名が付き添ってください)
- ◇ 参加費 : 無料
- ◇ 募集締切 : 2013 年 7 月 5 日 (金)

◆ 詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1278.html>



**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■「河川文化を語る会」**

JRRN 団体会員である公益社団法人日本河川協会から河川文化を語る会のご案内です。

**【第 180 回】**

- ◆ テーマ : 「～入口遊び de 出口は文化～「ほんものの日本酒から水陸両用車まで」
- ◆ 講師 : 須知裕曠 氏 (一般社団法人ふるさ都・夢づくり協議会 理事長/特定非営利活動法人日本水陸両用車協会 理事長)
- ◆ 日時 : 2013 年 7 月 29 日 (月) 18:00~20:00
- ◆ 場所 : シェーンパツハ・サポー (東京都千代田区)
- ◆ 詳細は以下参照  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1254.html>

**【JRRN 会員からの提供情報】**

**■『木津川カヌーの日』(9 月開催)**

JRRN 団体会員「カップ研究会」より御提供頂いたイベント情報です。

- 日時 : 9 月 8, 14, 15, 16 日
- 場所 : 木津川
- 主催 : 琵琶湖・淀川流域圏連携交流会

◆ 詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1257.html>



**【海外からの提供情報】**

**■「ECRR (欧州河川再生センター) の最新ニュースレター」ご紹介**

ECRR (欧州河川再生センター) の最新会報 (2013 年 6 月号) を ECRR 事務局より送付頂きました。

本号では、第 6 回世界水フォーラム (2012.3 フランス) を踏まえた今後 3 年間の欧州河川再生の取組み等が紹介されています。



◆ 詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1262.html>

**【海外からの提供情報】**

**■「RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (Bulletin)」ご紹介**

RRC (英国河川再生センター) の最新会報 (2013 年 6 月号) を RRC 事務局より送付頂きました。

本号では、RRC 年次講演会成果一式公開報告、スコットランドの洪水リスク管理に関わる動画等が紹介されています。



◆ 詳細は以下参照

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/1266.html>

**(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)**

※前頁でご案内した行事は本欄では掲載していません。

■第4回 全国源流サミット in 群馬県みなかみ町  
○日時：2013年7月5日(金) -7(日)  
○主催：第4回全国源流サミット実行委員会  
○場所：みなかみ町カルチャーセンター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1691.html>

■公開シンポ「都市河川の自然再生と防災を考える」  
○日時：2013年9月21日(土)  
○主催：応用生態工学会  
○場所：大阪府立大学 I-site なんば  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1711.html>

■東京の川を考えるシンポジウム 2013  
○日時：2013年7月23日(火)  
○主催：東京都建設局  
○場所：新宿区立 角筈区民ホール  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1705.html>

■第13回川に学ぶ体験活動全国大会 in 新潟見附  
○日時：2013年10月12日(土)～14(月祝)  
○主催：川に学ぶ体験活動協議会  
○場所：見附市アルカディア小ホール  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1685.html>

■遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム 2013  
○日時：2013年7月27日(土)  
○主催：堀川再生の会・五平太  
○場所：水巻町中央公民館(福岡県)  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1707.html>

■第6回 いい川・いい川づくりワークショップ  
○日時：2013年11月2日(土)～11月3日(日)  
○主催：いい川・いい川づくり実行委員会  
○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1635.html>

■応用生態工学会 第15回研究発表会  
○日時：2013年9月19日(木)～21日(土)  
○主催：応用生態工学会  
○場所：大阪府立大学なんばセンター  
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1662.html>

■皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！  
全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。(JRRN事務局)

**(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)**

※日本国内で開催される国際的シンポジウムも含まれます。

- 2013.8.19-21(ソウル/韓国) 6th Conference of APHW (APHW2013)
- 2013.9.2-5(京都/日本) 2th International Symposium on River Sedimentation
- 2013.9.8-13(成都/中国) 35th IAHR World Congress
- 2013.9.11(ウィーン/オーストリア) RESTORE conference, European river prize
- 2013.9.11-13(ウィーン/オーストリア) 5th European River Restoration Conference
- 2013.9.16-22(ウッチ/ポーランド) Ecohydrology, Biotechnology & Engineering
- 2013.9.23-26(ブリスベン/豪州) 16th International Riversymposium
- 2013.12.4-6(チェンナイ/インド) HYDRO 2013 International
- 2014.1.7-9(シンガポール) 7th Int. Symposium on Environmental Hydraulics ISEH
- 2014.2.24-27(パース/豪州) 35th Hydrology and Water Resources Symposium
- 2014.9.21-26(リスボン/ポルトガル) IWA World Water Congress & Exhibition

書籍等の紹介 Publications

■ PRAGMO 日本語版 河川及び氾濫原再生の順応的管理に向けたモニタリングの手引き(2012.11 発刊)  
・発行：ARRN, JRRN  
・監修：白川直樹 筑波大学システム情報系 准教授  
・翻訳：JRRN 会員ボランティア (10名)  
・編集：筑波大学白川(直)研究室『川と人』ゼミ等

■ 川を活かす・守る～河川再生事例集～ (2013.2 発刊)  
・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関  
・編集：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)  
・発行：公益財団法人リバーフロント研究所



※本冊子の入手方法  
本手引きをご希望の方は、JRRN事務局までご連絡ください。JRRN 会員限定サービスとさせて頂き、送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。非会員の方は、JRRN 会員登録(無料)後にお申込下さい。  
[info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) / 電話：03-6228-3862



河川再生に取り組む市民団体や行政機関の方々に、それぞれの活動を始めたきっかけ、目標、活動内容、今後の展望などを執筆頂きました。

※本冊子の入手方法  
上記と同様の方法でお申し込み下さい。

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。  
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

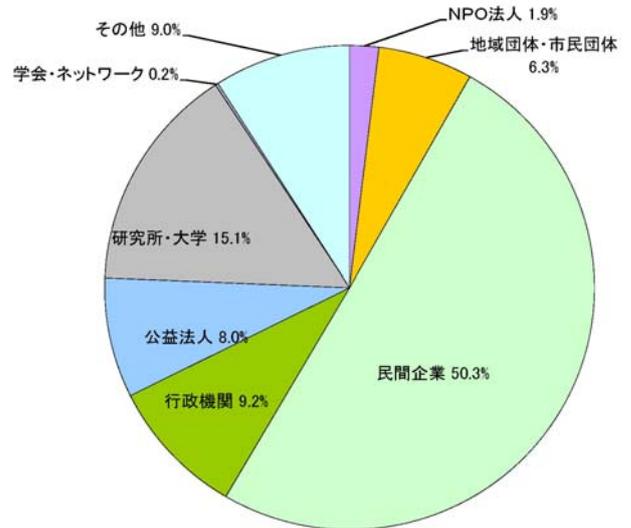
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2013年6月30日時点の個人会員構成  
(個人会員数：621名、団体会員数：51団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局  
 公益財団法人リバーフロント研究所 内  
 〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階  
 Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

